

## 〈死〉の受容と〈生〉の輝き（Ⅰ） —高嶺の死に向かって〈いのち〉の物語を生きる—

村上 則 夫

### 構成

1. 諸 言
2. 人としての〈生〉、人としての〈死〉
  - 2-1. 静思の時（Quiet Time）を持つこと
  - 2-2. 人間と動物との〈死〉の違い
3. 人間はやがて誰もが死ぬ存在
  - 3-1. 「死んでいる自分」を思い描けるか
  - 3-2. 人間の〈死〉という厳粛な現実
4. 「死生観」についての静思—〈死〉と〈生〉について—
  - 4-1. 一人称の死生観とは
  - 4-2. 〈生〉の最後のとき
5. 改めて、いまなぜ人の〈死〉を語る必要があるのか
  - 5-1. 人間の〈死〉がみえない現代
  - 5-2. 深みのある人生のための〈死〉

### 1. 諸 言

ここに執筆した愚稿は、人間の〈生〉と〈死〉の意味について静思したものである。

私たちの人生で最も重視すべきことは、〈生〉の過程（プロセス）であるが、〈生〉のその先には、必ず〈死〉が待ち受けている。では、はたして、〈死〉に意味があるのか？ 〈死〉にどんな意味があるというのだろうか？

「自分はいつ死ぬのか」、「どんなふうになんでいくのか」。これは、人間の心をざわざわと騒がせるテーマである。なぜならば、〈死〉とは、普通に考えれば、〈生〉の否定である。誰もが払いのけることも逃れることもできず、生きているという同じ確実さで人間は死ぬ存在であり、いのちの限界を前にして、死に強く抗議の声を

上げたとしても、現状は何も変わらないからである。

筆者は、この困難で、まったく解決のめどの立たない難問に、いつも深く魂を揺さぶられ続けている。まったく、おろかしいと笑われても、甘んじて受け止めたい。筆者は、人間の死には、大切なメッセージが込められていると考えている。死を通して、何か語られているはずである。むろん、だからといって、筆者が死を推奨したり、死を美化するつもりはさらさらないし、そのようなことは考えたこともない。

では、この誰にも必ず迫ってくる人間の〈死〉に、どんな意味があるというのか。逆に考えれば、人間の死に、何の意味もなく、ろうそくの炎が消えるように、その存在が消滅し、ただ、身体（肉体）が朽ちて土にかえるだけなのだろうか。

〈死生学〉(Thanatolog)の研究で知られるアルフォンス・デーケン (Alfons Deeken) は、『よく生きよく笑いよき死と出会う』<sup>1)</sup>という書名の著作を刊行しているが、愚稿全体での静思の順番は、むしろ逆で、人間の〈死〉について展開した内容が前半部分（第Ⅰ部）を構成し、そのあと、後半部分（第Ⅱ部）で、みずからの〈死〉を意識して生き、老いることについてあらわしてみる予定である。また、愚稿の刊行後は、もし可能であるならば、死にゆく人の魂に寄り添うこと、あるいは、死の後に残された人の心を和らげるために、生きている者に何ができるのか、その内容を簡潔に、日頃思いめぐらせていることを何らかの形であらわせればと愚考している。

なお、愚稿は、論理的な展開もなく、議論の体系もなしていない。テーマが重いために、あえて会話口調の部分も含ませながら筆者の考えを文章化したため、「研究ノート」というよりも、かなりとりとめもないような「随想メモ」程度の内容であるが、筆者としては、通算で37年ほどの大学教員としての筆者の「最終講義」に代えてここにあらわすものである。

この愚稿を目にする読者は、もしかすると忍耐を必要とかもしれない。なぜなら、この愚稿では、〈死〉や〈死ぬ〉というワードで埋め尽くされているため、もし読者が〈死〉や〈死ぬ〉というワードを見るのも嫌な方は、まったくこの愚稿はお勧めできない。もっと年齢を経て、「自分が死ぬ存在だ」と真剣に考える年齢に到達した時、死が身に降りかからない前に愚稿を思い出していただければと思う（しかし、その時には、筆者も地上生涯を終えているかも知れず、コメントをいただく機会がないのは残念であるが）。

また、テーマの展開上、愚稿では保健・医療・医学系の研究者や医師などがあらわしている書籍や公開資料、宗教学者や哲学者などの見解を参照しているが、専門

的な領域で検討されている〈死〉をめぐるさまざまな論理的、体系的な見解や議論に分け入ろうとするものではないことを付言しておきたい。

## 2. 人としての〈生〉、人として〈死〉

### 2-1. 静思の時（Quiet Time）を持つこと

いにしえの時代から、人間というのは、絶えず「自己の存在」を問題にしている存在者であり、生きる意味を探究する探究者であって、いつも他者（ここでいう他者とは、通常の他人だけではなく親、兄弟姉妹、夫、妻など自己と異なるすべての存在を意味する）と向きあい、他者ともに生きているとあってよいだろう<sup>2)</sup>。

さて、「現代」という時代は、時間の流れ方が異常に加速しているように思える。おそらく、いにしえの時代に生きていた人たちより、現代に生きる私たちの方が、情報と情報メディアの洪水の中で、はるかにあわただしい毎日を送っているといえよう。したがって、残念ながら、周囲や周辺の雑音と騒音などに心がみだされ、ゆっくりと時間をおしまず、静寂のなかで、日々のみずからの歩みを吟味し、模索し、悩み、喜び、とことん考え、気の合う仲間と語り合うという、人間の本来的ともいえる営みが不可能となっているのも事実ではなからうか。

だからこそ、未来が見通せず、あわただしく変化する現代社会に生きる私たちにとって、「いま」もっとも大切にすべきことのひとつは、静思の時（Quiet Time）を持つことではないだろうか、と考えている。私たち人間は、自分の人生において、本当に大切なもの（こと）を置き去りにして日々の生活を送り、生涯見失ったままで死を迎えるとしたら、〈人が人としてよりよく生きること〉とは、かなりかけ離れたものとなりそうである。

ところで、人間という「生きている存在」は、たまたま何かの状況や環境下で、まったく偶然に発生した原子や分子の単純きわまりない寄せ集め、偶然の集合体や集積体ではない。他の生物とは違って、「人格」を持ち、情愛を知る心と神を知る魂を持っている。それゆえに、人間の長い人生では、多くの喜びを味わい、悲しみや苦しみが与えられる、といっても、否定されることは少ないであろう。

これまでに、人間の〈生〉の意味、人生のあり方については、数多くの示唆と知見が見受けられる。人生の意味については、さまざまな視点から展開され、すでに数多くの著作が世に出ており、自分の歩んでいる人生に何らかの迷いが生じた時、このような著作は、自分を励まし、道しるべとなり、悩みの淵から立ち上がらせて、再び人生を歩もうとする力を与えてくれる。

では、〈死〉についてはどうであろうか。人生のような意味など〈死〉には全くないのだろうか。

筆者自身は、まったくそうは思っていない。〈生〉に意味があるように、〈死〉にも意味があるはずである。人間の〈死〉に意味があるからこそ、〈いのち〉に輝きが増し、感動的な〈いのち〉の物語を生きることができる、というのが筆者のゆるぎない思いである。

確かに、人間は、本来的に生きることが好きといえるだろうが、逆に、特別な状況下でない限り、喜んで死を迎えたい人は、ほとんどいないだろう。しかし、〈生〉と〈死〉について熟視し静思することによって、与えられた自分のいのちを輝かせ、最後の一瞬まで使いきることができる人々の存在を信じたい。たとえ、長い時間をかけて〈死〉について熟視し静思し、自分なりに得心を得たところで、いざ、本当に自分がこの地上を去る時、すなわち、「第三者の死」ではなく、「自分の死」の時には、何一つ手助けにはならないとしても、決して無駄ではないと考えたいのである。

そもそも、〈人間はどこからきて、どこへ行くのか〉という、いまだ未解決の知的探求は続いているが、そうであるならなおさら、人間の〈死〉という問題は、人間を真に理解するうえで避けては通れない問いである。

スイスの哲学者・法学者であるカール・ヒルティ（Carl Hilty）は、彼の著書『幸福論』の中で、「どんな死に方をするかということは、その前にどんな生き方をするかということと同じく、いずれにしても人々の意のままになるものではない。だから、あらゆる『人生問題』のうちのこの最後の問題」<sup>3)</sup>と、〈死〉を人生における最も重要な問題と位置づけている。とするならば、あらゆる人生問題の最後の問題について、何の意味も、何らのメッセージもないなどとは到底考えられないのである。

医師である柏木哲夫は、「人として生まれるとは、魂をもった存在として生まれることです」<sup>4)</sup>。「人として生きるとは自分の存在の意味を考えながら生きること、そして、死を視野に入れて生きることではないかと思っています。そうすることによって、生はおのずと充実します」<sup>5)</sup>と述べている。カール・ベッカー（Carl Becker）もまた、「人間は、自分の死を真面目に考える事によって、この世の中で、何が本当に大切であるかどうかの方が更に明確に見えている」と指摘している<sup>6)</sup>。

そこで、〈死〉の原因究明は医療・医学者や宗教家にゆだねるとして、〈死〉の意味が多少なりとも知れば、死にゆく時の恐れや不安、悲しみや寂しさが少しでも和らぐような気もする。いや、そうあれば、この愚稿もほんのわずかの貢献に値し

よう。

筆者として、可能であるならば、覚悟のできた人間として、〈生〉に執着せず、〈死〉を恐れずに、〈凛<sup>りん</sup>〉として人生を歩んでいきたい。しかし、果たして、本当にそのような歩みができるものなのか、かなりというより、ほとんど怪しいのである。

## 2-2. 人間と動物との〈死〉の違い

さて、動物はどうであろうか。みずからが生きていることを理解しているのだろうか。そして、死ぬことを理解しているのだろうか。

筆者は、動物学者ではないが、身近にみるネコや犬などの動物が、いのちの危険を避けるような行動はとり得るだろうが、「自分は、だんだん老いて、やがては死ぬ存在」ということを知っているとは到底思えないのである。

自然人類学者の江原昭善によれば、「動物たちには、生や死の観念がないことは経験的に確かだ。ただ、現在生きているその生を維持し、それを阻害する危険は本能的に忌避する。ただそれだけなのだ。死を避けているわけではない。死を避けているように見えるのは、その生の障害つまり危険が、そのまま死につながる人間が推測しているだけ」<sup>7)</sup>と考えられるという。

それに反して、人間は、みずからが、いつかは死ぬ存在であることを理解し、一度、死ねば、二度とは後戻りができないことを知識として理解している。

それでは、生や死の観念がなく、どんな条件下でも本能的に生き抜こうとするだけの動物と比べて、死ぬことを理解し、死におびえ、いい知れぬ不安と恐怖を意識できる人間の方が不幸な存在と考えることができるだろうか。「幸せ」といえる存在は、動物なのか、はたまた人間の方なのだろうか。

もちろん、それは人間の方に決まっている、いやそうであってほしいと願っている。謎めいた不思議な〈死〉について凝視し、みずからがいつかは死ぬと考えているのは、地上で「生きている存在」の中で、唯一人間だけであるといえよう。このことは、人間だけの特権でもある。もし、このことを人間にとっての幸福の一粒とするならば、いずれは人間も、動物も死ぬ存在にかわりはないとしても、死ぬことを理解できる人間の方が動物よりは幸せとってよいのではないかと考えている。

むろん、この点に関しては、正解も不正解もなく、もしかすると回答のない難問の一つに加えられそうである。

ただ、筆者としては、私たち人間が、〈いのち〉の輝きを増し加えつつ気高い希望とみずからの可能性を信じて歩み、身体が目立って衰え、臨終を迎える時、冬のクリスマスのライトアップされた輝き出る光のように、人間の人生の最高の峰、高

い山の頂上ともいえる人間の〈死〉のひらめきをもって輝きわたることができるようでありたいという切なる願いから、ここに愚稿を起こしたものである。

江原は、「人間の生や死については、生物学的な死に留まることなく、生態的、社会的、文化的、精神的なレベルでの生や死まで射程に入れて考察することが大切であるということだ。近年とくに医療技術の発達とともに、延命や死の定義にも変更が迫られるようになってきた。しかし、上記の論点は無視され、往々にして生物レベルでの死の論議に終始しがちなのは、残念なことだ」<sup>8)</sup>と述べている。

すなわち、動物は生物学的に生き、死ぬ存在であるのに対して、人間というのは、社会的に、文化的に、そして精神的に生き、そして死ぬ存在なのである。

書家・詩人であり、「書の詩人」、「いのちの詩人」とも称された相田みつをの〈つまづいたおかげで〉<sup>9)</sup>という詩の後半部分は、次のようになっている。

つまづいたおかげで

（前 略）

身近な人の死に逢うたびに

人のいのちのはかなさと

いま ここに

生きていることの尊さを

骨身にしみて味わいました

人のいのちの尊さを

骨身にしみて 味わったおかげで

人のいのちを ほんとうに大切に

ほんものの人間に裸で逢うことができました

一人の ほんものの人間に

めぐり逢えたおかげで

それが 縁となり

次々に 沢山のよい人たちに

めぐり逢うことができました

だから わたしの まわりには

みんな よい人ばかりなんです

死と死ぬということは、決して「悪」でもなければ、人生の「敗北」でも「恥」でもない。人間は、永遠に生きる存在として、この地上に〈いのち〉を与えられていない。誰にも同じように、確実に、まぎれもなく死ぬ時がやってくる。

もし、死と死ぬということが悪であり、人生の敗北であり、恥だとすれば、全人類は悪人であり、敗北者であり、恥の人生を歩んだ落伍者ということになるが、決して、そのようなことはないのである。

### 3. 人間はやがて誰もが死ぬ存在

#### 3-1. 「死んでいる自分」を思い描けるか

それにしても、人間にとって〈死〉は最高の謎そのものである。

誰もが知る論語の中に、「いまだ生を知らず、いづくんぞ死を知らん」という名言が知られている。〈人間の人間としての生き方〉も知らない筆者が、人間の人生の最高の峰、高い山の頂上ともいえる〈死〉という問題について静思したところで、何を得ることができるのだろうか、と赤面しながらも、まったく経験したことの無い死に向かっている一人の人間として、人間の死といのちの物語を語ろうと考えている。

しかしながら、「諸言」でも述べたとおり、筆者が〈死〉を推奨したり、〈死〉を美化しようなどとは全く考えていない。むしろ、いのちを持つものであれば、死と真っ向から向き合うことを通して、与えられた大切ないのちのあり方を再認識し、〈生〉と〈死〉への考察を深め<sup>10</sup>、みずからのいのちを輝かせてほしいと願っている。

ユダヤ教のラビであるハロルド・S・クシュナー（Harold S.Kushner）は、彼の著書『恐れを超えて生きる』の中で、次のように記している。「抽象的に死を語ることは、すべての人間にとって死は避けられないものだと言することは、哲学的かつ神学的な会話です。しかし、自分自身に死が一步一步迫りつつあるという展望に向き合うことは、ひどく勇気ある行為です」<sup>11</sup>と。また、世界的に著名なスイス生まれの精神科医であり、日本でも『死ぬ瞬間』（*On Death and Dying*, 1969）<sup>12</sup>の著者として知られるエリザベス・キューブラー＝ロス（Elisabeth Kübler-Ross）は、「われわれはすべて同じ運命を共有するのだという感覚、われわれは生きているという同じ確実さで死ぬのだということへの理解をつうじて、われわれは生においてもまた一つでなければならぬことを理解するにいたるであろう。われわれはお互いの違いを自覚し、自分自身のこのユニークな個性を貴重に思いながらも、同時にみな同

じく人間的であることにおいて一つなのだということを受容するにいたる」<sup>13)</sup>と述べている。

そもそも、筆者が勤務する大学での専門とする研究領域は、「社会情報学」と「地域社会システム」である。さらに、地域貢献活動のかかわりあいから「地域活性化」や「まちづくり」などに高い関心をもって調査・研究を試み、地域住民の〈いのち〉と〈絆〉の重要性を中心テーマとして<sup>14)</sup>、地域活性化支援、地域コミュニティの再生・発展などの実践にも取り組み、自治体の職員や地域住民などを対象とした講演会の講師や研修会の講師、またワークショップの進行役などもつとめてきた。

そこで、よく問われるのは、筆者が〈死〉と死ぬことを考えるきっかけである。それは、どこからやってきたのか。なぜ、筆者が〈死〉を問うのか、という質問である。確かに、後ほど簡単に紹介するが、筆者自身がかつて大病でみずからの〈いのち〉を失う経験をして、死に直面した経験者となったことは一つの転機となっていることは疑い得ない。

また、筆者がすでに還暦を過ぎて人生の時間を折り返したこと、親しい友人や知人の死、親類の葬儀への参列、そして、講演会の講師や研修会の後のアンケートに記された高齢者の方々の意見や感想などを拝読するうちに、「第三者の死」ではなく、「自分の死」への関心をしだいに高めていったことは間違いないことである。

O・ヘンリ（O.Henry）の短編「振子」という作品の中に、「美しい声の小鳥が飛び去るまでは、われわれは、その美しい声を真実には鑑賞しようとしていない、ということは、諺や説教や寓話によって、あるいはそれ以上に説得力のある名言によって、すでにいやというほどかかされてきたのではなかろうか」<sup>15)</sup>というフレーズがあるが、家族や親族、友人や知人、そしてみずからが死に直面しなければ、〈死〉とは何か、死後はどうなるのか、〈死〉の意味というものについて真剣に考えもしなければ、「生きている存在」というのは、いつかは死ぬ存在であるという現実を真に受け止めることはないであろう。

とはいえ、「死んでいる自分」を思い描くことが、簡単にできるだろうか。

すなわち、まったく意地の悪い問いかけではあるが、今まで自由に動いていた身体（肉体）が冷たくなり、もう二度と立ち上がることも、息をすることも話すこともなくなった自分の姿を思い描いたり、想像することが可能であろうか。

〈死〉というのは、相手を選ばず、時には、時間や空間も選ばない。社会的な地位や身分、有名・無名はもちろん、貧富の差も関係ない。いくら、“いまはまだ死にたくない。まだ、やり残したことがある”と叫んでみたところで、どうしようもない。大晦日であろうが正月であろうが、また、誕生日であろうと時を選ばず、そ



して、必ずしも病院のベットや自宅の一室とも限らない。〈死〉は予想もせずに、突然、訪れる時もある。

『新約聖書』の「ルカの福音書」の中に、次のような〈たとえ話し〉がある<sup>16)</sup>。

ある金持ちの畑が豊作であった。

彼は心の中で考えた。『どうしよう。私の作物をしまっておく場所がない。』

そして言った。『こうしよう。私の倉を壊して、もっと大きいのを建て、私の穀物や財産はすべてそこにしまっておこう。』

そして、自分のたましいにこう言おう。「わがたましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ休め。食べて、飲んで、楽しめ。』

しかし、神は彼に言われた。『愚か者、おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。お前が用意したものは、いったい誰のものになるのか。』

どんなに財産を蓄えても、死の時は突然のことかもしれないし、何一つ持ってあの世に旅立つことはできない。人間が死ぬ確率は、どんなに泣こうがわめこうが、誰もが等しく100パーセントであり、払いのけることも、まぬがれることもできないければ、省略することもできないのが、生けるものの死であるはずだ。

それは理解できる。しかし、では、いま、死んでいる自分を思い描くことができるのか、という問いにはどう答えることができるだろうか。

おそらく、喜んで思い描くことができるという答えは少数であろう。それは、ほとんどの人が、今の自分が死ぬことを本気で考えることができないか、あるいは、みずからの死を考えたくもないからであるといえる。

たとえば、ある余命数ヶ月のがん患者がいたとする。このようながん患者に、“あと数ヶ月のいのちしかない”と余命宣告すべきなのか、いや、余命宣告はせずに、生きる希望をもったままで治療を続けさせるのか、いまもって家族や親族の決断に差がある。それは、本人にとっても、死を知りながら生きるのか、死を知らずに生きる希望を持ちながら治療を受け続けていくのか、悩み迷わずにはいられない。この問いへの答えは、いつにあっても難しい。

むろん、本人、そして家族・親族がいずれの判断をしたとしても、なんら責められる筋合いはまったくないだろう。誰もが、たとえ、このような死を思い描けない、つらい現実を突きつけられたとしても、いつまでも、そのがん患者が自分を含む多くの人々の身近に留まり、真に幸福であってほしいと強く願う限り、いずれの判断にも、「ミス」といったものはないと思いたいのである。

### 3-2. 人間の〈死〉という厳粛な現実

室町時代の臨濟宗大徳寺派の僧であり、詩人としても知られる一休宗純（一休禪師）<sup>17)</sup>の有名な言葉の一つに、「正月は冥土の旅の一里塚、めでたくもありめでたくもなし」という名言がある。人間が歳をとるということは、死に近づくことでもあると、世の無常を説いた言葉である。

また、江戸時代後期の曹洞宗の僧侶・歌人・書家として知られる良寛は<sup>18)</sup>、「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候、死ぬる時節には死ぬがよく候、是はこれ災難をのがるる妙法にて候」という言葉を残しているが、「死ぬる時節には死ぬがよく候」と平静な態度でいれるかどうかは、かなりの覚悟がいそうである。

実のところは、筆者はいまから十数年以上前に、みずからのいのちを失う重病に倒れたことがある。これは、みずからの死を身近に強く意識した初めての体験でもあったことから、簡潔にその体験談を記してみたい。

平成18年（2006年）4月上旬、筆者は、ある総合病院の待合室で内科医の呼び出しを待っていた。

その一週間ほどまえ、職場から自宅への移動中、胃腸にこれまで経験したことのない激痛を感じ、投薬後、すぐにその時は痛みがおさまったものの、念のため翌日に胃腸の精密検査を受けることにした。その精密検査から一週間後、検査の結果を医師から聞くために、総合病院の待合室にいたのである。

それまで、健康にはある程度自信もあり、多少なりとも健康に気をつけてもいたが、今回感じた激痛は尋常ではないという不安もあり、これまでにない緊張感のある時間を過ごしていた。やがて、呼び出しの順番となり、担当の若い内科医と向き合った。

開口一番、その医師は「胃に悪性腫瘍がありますね」と言う。「それは、胃癌ということですか？」と尋ねる私に、「そうです。早期胃癌です。すぐに入院してください」というのと同時に、机の引き出しから入院手続きのための書類を数枚渡され、もはやみずからの選択の余地もなく病院への入院手続きを済ませ、その数日後に入院・手術を行った。その結果、リンパや他の臓器への転移もなく、胃の上部の切除だけで済んだものの、自分の胃の大半を失うこととなった。

それは、あと1年で50歳を迎える時で、この年齢であれば、たいていの人間は、職場ではあれもやりたい、これもやらなければ、という多忙ながらそこに充実感や満足感を味わう時期でもある。そんな時に、早期発見とはいえ、よりによって「胃癌」の宣告である。幸いにも、あれから再発もなく、十数年以上を過ぎて、今では問題のない健康な日々を過ごしているが、入院中に病院の廊下の窓から見た4月の

満開の桜が目に焼きついている。その桜の木は、入院した病院内の敷地にあったものだが、いずれ散る花でありながら、生を誇るかのように咲いて見事であった。

個人的な述懐になってしまったが、癌の宣告を受けるまでは、みずからの身体(肉体)が失われるという実感はなく、自分自身の身に起きることとして真正面に考えることはなかった。まさしく、人間の死というのは、まったくの他人事であり、それまで与えられた時間は無限にあると勘違いしていた自分のなさけなさ、愚かさ、そして無知に腹立たしささえ覚えたのである。

さて、あえて指摘するまでもなく、今日の日本における「高齢化社会」では、「多死社会」という新しい局面へ入りつつあるという認識が一般化しつつある。

近年、日本では、100歳以上の長寿者が全国で7万人を超え、今や日本が世界に誇る長寿国となっていることは、さまざまなメディアが伝えていることであり、ここであえて詳しいデータを持ち出すまでもないだろう。

しかし、その一方で、高齢者の増加は、そのまま死者数も増加することを意味する。確かに、それは、まぎれもなく当然なことであり、どんなに長寿を誇ったところで、死を払いのけることができなければ、平均寿命（厚生労働省によれば、令和元年（2019年）の日本人の平均寿命は男性が81.41歳、女性が87.45歳）前後から、100を数える年齢までの20年の間に、集中した形で多くの人たちが死を迎えることになる。確かに、現代の看護・栄養・医療技術などによって、人間は死を遅らせることには成功しているが、誰であっても死を逃れることができないからである。

厚生労働省の「人口動態統計」によると<sup>19)</sup>、令和元年（2019年）の1年間の出生数は86万5,234人で、前年の91万8,400人より5万3,166人減少し、出生率（人口千対）は7.0で、前年の7.4より低下している。他方、死亡数は138万1,098人で、前年の136万2,470人より1万8,628人増加し、死亡率（人口千対）は11.2で、前年の11.0より上昇している。

そして、さらに、死者数は今後も増え続けて、西暦ではピークとなる2040年頃には、年間約160万人が死亡するという予想も行われており、人間の死という厳粛な現実を目の当たりにすることになる。

また、周知のとおり、昨年（令和2年）春から今年に入っても、新型コロナウイルスの感染拡大がとまらず、ウイルスに感染して重症化した重症者数や死者数も次第に増加傾向をみせており、いまや誰もがウイルス感染を恐れながらの日常生活をおくっている。それは、決して、望むべき現実ではなく、誰もが早期の収束を願っていることはむろんだが、一方で、イギリスやフランス、アメリカなど先進国における死者数の容赦のない増加、また、日本においてもコロナの感染が原因で死亡す

る死者数の日々の増加はとどまることがない。

国内外の情報の多くはメディアを介してではあるが、現代に生きる私たちが、このような形で、人間の死をはっきりと身近なこととして受け止めざるをえない経験を誰も予想しえなかったであろう。

ここ最近の新型コロナウイルス感染者の「死亡」は、家族も親族も見守ることが許されず、ある意味で孤独な悲しい人生の終わりという光景が強く、人々にウイルス感染者の死はこわい、恐ろしいという感情を増幅させている。

そのことは、ますます、老若男女に死とは恐ろしいものだというイメージを定着させるのに十分な役割を果たしているといえるのである。

エリザベス・キューブラー＝ロスは、『続 死ぬ瞬間—最後に人が求めるものは—』の中で次のように述べている。「人類が誕生してから、有史時代にもいくつかの揺れうごく時代があった。この過去に、人間は、いまのわれわれには理解も想像もできないほど大量に多数に、戦争と疫病の犠牲となって死んでいった。いま生きているとは幸運の成就に過ぎず、死は富めるも貧しきも、善きも悪しきも無差別に人間を打ちのめす、恐るべき、こわい敵であった」<sup>20)</sup>。「そしていま、人類がかつてないまでに死と破壊に囲まれている現代では、われわれが死の諸問題を研究しその真の意味の理解につとめることが根本的な重要性をもつにいたった。死の理解をもとめる人々にとって、死はきわめて創造的なひとつの力である。生の最高の精神的価値が死への思索と研究とから生まれ得るからである」<sup>21)</sup>と指摘している。

## 4. 「死生観」についての静思—〈死〉と〈生〉について—

### 4-1. 一人称の死生観とは

人間の「一生」という時間はたちまち過ぎるのに、いつまでも、この地上に生きて、身体（肉体）と精神を動かすことが当たり前のように、日々の生活を営んでいる。

ここでいう、一人称の死生観とは、「一個人の死生観」であり、集団の死生観でも、社会の死生観でもなく、「いま、ここ」に生きる個人（個体）という一人ひとりの人間の死生観のことを意味している。

そして、あえてここでは、人間一人ひとりの「死生観」を「〈いのち〉の物語への心のあり方」として考えてみる。むろん、このような筆者の考え方は、専門的な宗教学でも哲学や倫理学でも、また思想などから引き出した考えではなく、あくまで著者個人の創作である。

さて、「死生」の語意は、文字どおり、死ぬことと生きることである。

一般的に、「死生観」とは、簡潔には、〈生〉と〈死〉に対する見方、あるいは、生きることと死ぬことについての判断や行為などの指針や根本的な考え方、と説明できるものであるが、日本における「死生観」という用語は、比較的新しい言葉であり、100年ほど前の研究や著作に由来するものようである。

人間は、気の遠くなるような古い時代から、「どう生きていこうか」を思案し、「どう死のうか」を積極的に考えていたとはいい難いのではないだろうか。あくまでも、地上にある身体（肉体）は死んでも、その存在は消滅して無に帰すのではなく、死後も生は継続するという考え方が支配的である。

たとえば、「ナイルの賜物」とうたわれた古代エジプトの地では、新生児の死亡率は高いうえに、大人でも疫病や飢饉で死んでいく人も数多く、常に死が身近にあり、生と隣り合わせの生活だった。

古代エジプト人は、死ぬと靈魂となって地上の生涯を離れ、冥界を抜けることができれば来世（死後の世界）で永遠に生を謳歌できると信じており、それが彼らの死生観であったといえる。古代エジプト人は、現世の続きを来世（死後の世界）で「復活」して永遠に過ごすことができると考えていた。そして、死者が無事に冥界を抜けることができるように、死者の埋葬時に添えられた葬祭文書が『死者の書』（『日の下に現れ出る書』）である。『死者の書』（『日の下に現れ出る書』）は、もともとは、来世（死後の世界）の「復活」に必要とする呪文を記した巻物であったが、第11王朝時代（紀元前2000年頃）になると呪文は柩に書かれるようになったという。

また、古代中国においては、死者の墓に副葬される冥器の一種が「俑」であり、死後の靈魂の生活のために製作された。「俑」のうち、兵士及び馬をかたどったものを「兵馬俑」という。「兵馬俑」といえば、昭和49年3月（1974年3月）に村の住民によって発見された、中国陝西省西安市臨潼区の始皇帝陵兵馬俑坑出土のものが世界的に有名であり、その後の調査によって、亡くなった始皇帝の来世での生活のために必要な数々のものが埋納されていることも知られている。

『旧約聖書』の「創世記」では、神が人を形作り、いのちの息を吹き込んで、人は生きるものになった、と記されている<sup>22)</sup>。『聖書』では、すべてのいのちは神によって与えられたものである。そのいのちは、単に生物学的ないのちだけではなく、靈的いのちであり、動物と違って、神の存在を知り、神との交わりを可能とするものである。そして、『新約聖書』の「ローマ人の手紙」では、次のように記されている。「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともにほうむられたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中

からよみがえられたように、私たちも、新しいのちに歩むためです。私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです」<sup>23)</sup>。

すなわち、『聖書』では、人間のおかした罪と<sup>とが</sup>咎とが神との交わりを絶ち、すべての人間は地上での死を経験する。人間は死を見、死を味わうと語っている。だが、罪深い人間みずからが自分自身を死から救うことはできない。人間は死に対して全く無力なのである。しかし、『聖書』では、神の御子イエス・キリストが死に対して完全に勝利をおさめ、人間を死の支配から救って解放することが告げられている。神を信じる者には、一方的な神の愛と恵みと<sup>あわれ</sup>憐みによって、神との関係の回復と死後の永遠のいのちが約束されているのである。女性神学者として知られるドロテー・ゼレ (Dorothee Sölle) は、著書『内面への旅—宗教的経験について—』において、「死によってすべてが終わってしまうのか、というのは神を信じない者の問いである」<sup>24)</sup>と記している。

あるいはまた、医師であり僧侶でもある佐々木恵雲によれば、仏教では、生と死は一体として捉えていると説明している。

日本の神道（原始神道）では、死をケガレ（不浄）とみなして恐れの対象としたが、仏教では、死をケガレ（不浄）とはみなさない。「『生きる』『死ぬ』と書きますと、私の医師仲間は、大体『せいし』と読み、仏教者は『しょうじ』と読みます。特別仏教と関係のない普通一般の人で、これを『しょうじ』と読む方はほとんどおられません。大概の人が『せいし』と読みます。『生きる』『死ぬ』を『生死（せいし）』と読む場合、例えば医者立場から言いますと、そこには生と死を対立したものであるという考え方が背景にあります」。「『生きる死ぬ』を『しょうじ』と、仏教語として読みますと、この逆は『涅槃』という言葉になります。サンスクリット語で『しょうじ』は『サンサーラ』、『涅槃』は『ニルヴァーナ』と言います。仏教では、『涅槃』を『悟りの生』と考え、『しょうじ』を『迷いの生』と捉えます。科学では、生と死は対立するものとして捉えますが、仏教では、生きていることと死んでいること、生と死は一体であると捉えます。ここに仏教的な考え方の特徴があります」と説明している<sup>25)</sup>。

生と死は、一本の「糸」のようである。それは、日本の「季節」にたとえば、春の到来から日差しの強い夏へ、そして夏からやや冷たい風を肌を感じる秋、さらには、木枯らしの吹く秋から肌寒い冬へと、ゆるやかに変化していくような一体感ではないだろうか。

詩人の大岡信は、死は実際には、「最後の瞬間にだけ出現するものではなく、生

きている人間の生活そのものの中に長期にわたって潜在し、また顕在化もするという、もう一つの重要な側面がある。「この側面から見れば、死はさかのぼって誕生の瞬間にまでその来歴をたどることのできるものである。人は誕生の瞬間から、やがて確実に到来する死との対決に向かって歩み始めている。そこにだれ一人例外はない」<sup>26)</sup>と述べている。

そもそも、よくよく考えてみると、「人が人としてよりよく生きる」という言葉は、筆者もよく用いる言葉であるが、「よりよく生きる」、あるいは、「豊かに楽しく生きる」という総体の中には、〈死〉という観念が排除されているのではなく、死をも含めての「よく生きる」、あるいは、「豊かに楽しく生きる」と考えるべきであろう。

知る人ぞ知る鎌倉末期の隠遁者・文筆家として知られている吉田兼好（兼好法師）の日本三大随筆の一つとされる『徒然草』の中で、人間の生と死について、さまざまな形で語られていることは広く知られている。それこそが、吉田兼好の死生観とってよいであろう。

たとえば、人々に愛読されている箇所には、「人、死を憎まば、生を愛すべし。存命の喜び、日々に楽しまざらんや」（第九十三段）であろう。「死を憎まば」は、死を憎悪するというのではなく、人間は必ず死ぬ、という厳然たる事実に対する覚悟をあらわす言葉であろうから、死に対する覚悟を決めて、生かされている〈生〉を愛し、生きているということを日々楽しまないでいられようか、といった意味に捉えることができよう。

今から700年ほど前に生きた兼好法師の発するこの言葉は、兼好法師が生きていた時代において極めて示唆に富んだ名言と思いたいが、700年を経た現代においても、ほとんどの人々がこの言葉どおりの人生を過ごせていないのではないか、という点から問えば、やはり現代人に対しても驚くほど示唆に富んだ内容であると賞賛することができよう。

ドイツ文学者で作家の中野孝次は、「死を見ることがすなわち生の<sup>ただいま</sup>只今を輝かすことであるのを、兼好法師くらいよく心得、実行していた人はいなかった。それが日本文化であった」と、兼好法師のあり方を高く評している<sup>27)</sup>。

なお、死後の世界は、未知の領域である。すなわち、死後の世界や死後の魂の行方は未知そのものであり、そこに、言い知れぬ不安と恐怖が潜んでいる。

死後の世界は、神話や伝説のように、あるいはまた、宗教家が語ったり、私たちが幼いころに教えてもらった天国と地獄の世界なのか。自分の魂は消滅せずに、永遠の安らぎを得ることができるのか。いまもって、死後の世界や死後の魂の行方は、

なんら知り得ないし、確固とした証明を試みようとしたところで、何の成果も得ることはできないでいる。

#### 4-2. 〈生〉の最後のとき

テレビなどで放映される日本の時代劇で、「犬死」という台詞が語られることがある。むろん、現代では、もはや死語に近いが、「犬死」という用語は、現代の辞典にも掲載されており、「犬が死ぬのと変わらない、結果として何の役にも立たない死に方。むだじに。」とある。こよなく犬を愛している人にとって、「犬死」という表現は、人権侵害ならぬ、「犬権侵害」もはなはだしい表現で、とうてい受け入れられないことであろう。

「犬権侵害」はさておき、どのような死に方であろうと、戦争や紛争状態、あるいは犯罪行為など、特別な状況を除けば、通常想定される人間の死に「犬死」と称する無駄な死に方はないと断言したい。

さて、早春の満開の桜や真夏の夜に打ち上げられる花火、優れた文学や数々の芸術作品には感動するが、やはり、人間のみごとな生き方や覚悟の死に、精神が浄化され、魂がふるえたつほどの感動から、心が揺り動かされた経験は誰にもあることであろう。

みずからの死を覚悟し、はっきりと死をみつめることによって、生の最後の時を輝かせた生き方の例は多い。日本の古歌、辞世の句、格言、あるいはまた、実際に過去に生きた先人の生き方やあり方、さらに、書籍などで語られている逸話や物語の痕跡をみると、確かにふるえるほどの感銘を受ける、人生の最後の瞬間を輝かせた〈生〉を生きた人物の存在が浮かび上がる。

「武士道」というのは、日本人固有の精神的道徳観であり、伝統的倫理観であり、そして死生観そのものといってよいだろう。

春咲き誇る桜は〈死〉をイメージする。「花は桜木、人は武士」と語ったのは、一休宗純であると伝えられている。花の中では、散り際の桜が美しく、武士の死に際の清さが美しい、といった意味であろう。確かに、桜という花は短い期間に美しく咲き誇って、あとはあっさり和一拳に散ってしまう、そのいさぎよさに感銘を受ける日本人もいれば、「もののあわれさ」を感じる日本人もいるはずである。

東京女子大学学長や国際連盟事務次長なども歴任した新渡戸稲造が、アメリカにおいて日本独特の倫理観を英文で紹介した『武士道』(*Bushido; The Soul of Japan*, 1899)は、当時、国際的に評価され、近代日本の成り立ちの原動力となったと評されている。まさしく、いつの時代においても、「武士道」は日本人の偉大な精神的



「遺産」といってよいだろう。「勇」をもって「義」を実践する精神は、まことにとうと尊い。

また、元肥前国佐賀鍋島藩士であった山本常朝じょうちようが口述し、それを藩士である田代陣基たしろつらもとが筆録してまとめた『葉隠』もまた、日本人の生と死のあり方を考える武士道精神の歴史的名著といつてよいであろう<sup>28)</sup>。『葉隠』といえば、「武士道と云ふは死ぬ事と見つけたり」という一節が特に知られている。むろん、この一節に対する解釈の誤解から歴史上の悲劇的行為もあったと伝えられているが、『葉隠』が説く武士の教訓（心構え）は、現代の私たちの生と死のあり方にも学ぶところは多い。

さらに、「陸軍大将の ぎ まれすけの乃木希典」という名前を聞いても、現在の20歳代や30歳代の若い人たちには、ほとんどなじみのない名前といつてよいかもしれない。

この人物に関しては、とりたてていかめしい文献を持ち出すまでもなく、数多くの著作や学校の教科書などで、「乃木大将」や「乃木將軍」として、その人物像が詳しく紹介され、京都府、東京乃木坂、山口県下関市、栃木県ないし北海道など、日本の各地に乃木まっを祀った「乃木神社」が建立されている。

乃木希典は、嘉永2年11月11日（1849年12月25日）、長州藩の支藩の長府藩の藩士・乃木希次まれつぐの三男として、江戸の長府藩上屋敷（現：東京都港区六本木）で産声を上げた。乃木希典は、その生い立ちにおいて数々のエピソードを残しているが、「乃木大将」や「乃木將軍」として知られたのは、日露戦争において、当時難攻不落とうたわれた旅順攻囲戦を指揮して攻略したことから、日本海海戦などを指揮した連合艦隊司令長官の東郷平八郎とともに日露戦争の英雄とされたことによる。

しかし、今日でも、武士道の精神を重んじて真の武士として乃木の名を後世に残したのは、何といつても、乃木夫妻の殉死であることは疑いようがない。

大正元年9月13日（1912年9月13日）、それまで武士としてつかえていた明治天皇の後大葬の日、天皇のご遺体を乗せた靈柩が宮城を出発する号砲が鳴った午後8時頃、乃木は当時の東京市赤坂区新坂町（現：東京都港区赤坂八丁目）の自邸において、妻・静子とともに日本軍刀を用いて切腹して殉死した。享年64歳（満62歳）の時のことである。

そののち、この乃木希典の殉死については、当時においてさまざまな意見がかわされ、賛否両論があったことは容易に想像がつく。筆者自身としては、あくまでも個人的な見解に過ぎず、時代錯誤もはなはだしいと指弾されそうだが、あえて批判を受けることも覚悟の上で述べれば、乃木が最後に選んだ「切腹」は、まさしく真の武士でありたかった乃木の、いのちをかけた美しい行為であり、覚悟を重んじる武士の孤高な精神のあらわれとして、これからも「生の最後の時を輝かせた人生」

の体現者として語り継がれてほしいと考えている。

またさらには、大岡信の著した論文「死生観私見」に紹介されている密教修行僧の話を紹介したい。以下の内容は、大岡の論文からの抜粋である<sup>29)</sup>。

ある夕食の席で、密教修行僧の興味深いお話を聴く機会があった。

密教修行の中に、「護摩」というのがある。火炉をそなえつけた護摩壇に乳木穀物などを焚きながら祈って、内心の煩惱や業を焼きほろぼす修行である。火熱に耐える一種の凄まじい行法で、護摩を焚きながら、そのまま死んでいった老修行僧があったということである。

必死になって祈りながら、何千本という護摩を焚きつづけていた老僧は、全身火だるまのようになって、今や最後の護摩木を炉に投げ入れようとした瞬間、突如、仁王立ちになり、カッと大きく目を見開いたと思うと、護摩木をガッシリ握りしめたまま、どっと倒れて大往生したという。

日頃弟子たちに、「祈りながら死ね」と教えこんでいただけに、文字通り、そのまなましい姿を目のあたりにした時には、強い感銘を受けた、とのことであった。

まさしく、いのちがけの修行であるが、本当に「祈りながら死んだ」老修行僧の姿は、共に歩んだ弟子にとって、〈生〉の最後の時を輝かせた人生とうつつたに違いない。

## 5. 改めて、いまなぜ人の〈死〉を語る必要があるのか

### 5-1. 人間の〈死〉がみえない現代

確かに、私たち人間の死はつらく悲しく、自己の存在が消滅し、何も残らないかもしれないという恐れがあるとしても、死を人生の否定的、破局的なものとして理解するよりも、死を人生における肯定的、創造的なものとして捉え、しっかりと死に向き合い、〈死〉の意味を理解し解明することこそが、より人間の〈生〉の意味をより深いものにし、死の恐怖と絶望感を少しでも克服できるのではないのか、そこに〈死〉を語る意義や必要性があると考えてみたいのである。

さらに、現代という時代は、人間の〈死〉の意味について静思しようにも、実際には、人間の死がみえない時代となっている。はたして、それでよいのだろうか。そこにも、人の〈死〉を真に語る必要性があると思えるのである。

さて、人間の死がみえないという点であるが、それは、以下の二つの側面から考

えることができる。その一つ目の側面は、「死という言葉」がみえないことである。

日本人には、あまりなじみのない言葉であるが、欧米では、日常的に、ラテン語の「メメント・モリ（memento mori）」という「自分が（いつか）必ず死ぬことを忘れるな」、「死を忘るなかれ」という意味の警句がよく語られるという。

以前の愚稿でも述べたように<sup>30)</sup>、日本では、死を深く考えたり、日常的に死を語ることは不吉だとして、会話の口にのぼることは意図的に避けられてきた。私たち人間が死に定められた存在でありながら、会話の中でいつか死ぬなどと語ろうものなら、「縁起でもない」とあえて口にすることが避けられ、いつの間にか、死や死後の世界を語ることは不謹慎なこととしてタブー視され、それは現代においてもなお何ら変わることはない。

最近では、私たちの身の回りでも、しだいに〈生〉と〈死〉を書名とした書籍も目にするようになり、生と死をめぐる身体的、経済的、文化的及び社会的な問題などが広範囲に取り扱われるようになってきたが、それでも、人間の死は日常的に話題にするテーマとはいいい難いのである。

人間は、この世に誕生すれば、そのいのちが尽きるという、漠然とした感情はあっても、いつかは死ぬのが当たり前という自明の事実から目をそむけて、〈死〉という問題をあえて曖昧なままに遠ざけてきたのかもしれない、あるいは、既述したように、「死んでいる自分」の姿を想像できなければ、思い描くことが不可能だからかもしれない。「死んでいる自分の姿」を想像して喜んでいる人間は、どこにもいないであろう。

過去においても、そして現代でも、もっぱら、〈生〉や〈死〉といえ、ごく近年まで文芸や哲学、宗教的な領域で扱われ、嬉しくも楽しくもない死について、日本人があえて日常的に口にする話題とは程遠いといつてよい。

一般的なこととして、死へのいい知れぬ恐れは、多くの人間の共通した感情であろう。やや重い言葉を用いれば、「戸惑いと抵抗、不安と恐怖とが複雑に交錯する死の底知れぬ暗黒」<sup>31)</sup>そのものといつてよい。天国や地獄、極楽浄土など、いろいろな死後の世界が語られても、それが本当に存在するのか、それがどこに存在しているのか、その確証はだれにも証明できないこともまた、死への恐怖をもたらす大きな一因であろうし、そこに〈死〉への疑いをもったとしても、少しも批判されることではない。

筆者としては、かなり本音をいえば、とうてい、かっこよく、〈凜〉とした、いさぎよい死は無理としても、周りを楽しませ、笑わせて死ねたら、「私らしい死」といつてもらえそうで、それなりに自分の死に方を考える時間が増えつつある。と

はいえ、重い難病を発症し、ぎりぎりの死線で踏みとどまり、一日一日、一時間一時間をおしむことなく懸命に生きる闘いをやむなくせざるを得ない状況にある方たちのことを思うと、心が痛んでしょうがないし、涙がとどめようもなく落ちる。それが若い人ならなおさら、私は死んでもその方たちには生きていてほしい、といつも願ってしまう。死を吹き消せるものなら、吹き消してやりたいともがきたくもなる。

二つ目の側面は、「死にゆく身体」がみえないことである。

日本を代表する経済学者であった隅谷三喜男が、みずからの癌の体験を綴った文章の中に、「人生は人によってさまざまな姿をとる。しかし、誰もが一度必ず出会うのは〈死〉である。ところが、平和で長寿になった現代社会では、〈死〉ははるか彼方かなたのこととなり、日常生活からは忘れられた事柄ことがらとなってしまった。中世、いや近世の人たちでも、死を日常的に目撃し、自らも死と隣り合わせで生活している実感を持っていた。だが、死は現代人である我々からは、姿をかくしてしまった」と述べ、「考えてみれば、必ず訪れるこの〈死〉を忘れているところに、現代の病があるのではないだろうか」<sup>32)</sup>と指摘している。

また、中野孝次もまた、「健康で、清潔で、ピカピカのもの以外は、人目に触れぬところに隔離されてしまった」。「死は（死とともにそれにまつわるすべてのものは）、日常世界の外に追放された。死が見えない社会になった」と述べ、続いて、「死が見えない社会とは、すなわち生が見えない社会である。今の日本くらい生の本当の姿の見えなくなった社会は、日本史上初めてであろう。ついこないだまで、死は日本文化の中心にいつもあった。中世以来ずっとこの国は、死を現実の中心すに据えることによって生の輝きを見出しみいだて来たのである」<sup>33)</sup>と叙述している。

昔の日本であれば、祖父や祖母が亡くなる時に、家族の全員が枕元に並んで、その最後を看取ることが習慣として当たり前であり、「死んだ身体」を目にすることもあった。しかし、最近では、病院で死亡する人の割合が高く、ほとんどの人が自宅ではなく病院で臨終の時を迎える。そのためもあってか、実際の死を看取するという経験をする機会がなくなり、とりわけ現代の若い年齢層の人たちは、人間を含めて、いのちあるものの死の現場に立ち会うということがなくなっているのが現実である。したがって、もはや「死んだ身体」は、葬儀に参列さえすれば、ほんのわずかな時間、目にすることはできるが、「死んだ身体」は徹底的というほどに隠されてしまう。しかしそれは、〈生〉からゆっくりと〈死〉に移る「死にゆく身体」ではないのである。

それは、私たちの目の前から、死をできるだけ遠ざけようとしていることに他な

らず、〈死〉へのイメージを不明確なものにする要因でもある。

以上のように考えると、現代人にとって、死は身近なことではなく、死を自分のこととして引き受け、みずからの望むべき死に方を思慮する機会さえ失うのは当然なことかもしれない。

私たちすべての人間は、1年に一つずつ、必ず歳をとる。歳をとるのと同じように、必ず死を迎える時がくるが、年を知るのはすんなり受け入れても、死ぬことを受け入れるのはかなり難しい。しかし、いざ臨終の間際に至って、「死とは何か?」、「死にどんな意味があるのだろうか?」と考えるには、あまりにも遅すぎる。みずからの臨終の時に、魂の動揺と不安を軽減し、後悔と無念を残さず、みずから死ぬ時にしっかり死ぬ覚悟のためにも、身体（肉体）と精神が健全なうちに死への準備が必要ではないだろうか。

そのように考えるからこそ、当然、筆者自身も含めて、自分らしい最後の時を静思することは必要であると愚稿を記しているのである。

## 5-2. 深みのある人生のための〈死〉

ここまで、しつこいくらいに何度も繰り返したように、私たち人間は、生を受けた以上、永遠に生きることなく、いつかは地上生涯を終える存在である。ひとり孤独に空を飛ぶ鳥のごとく、この地上を飛び去らなければならないが、人間の死は、旅人が、「ただいま」と我が家に帰るようなものと考えれば、死を嫌悪することもなければ、死を決定的に悪いことと考える必要もない。

いずれにしろ、どのように考えても、〈死〉のない〈生〉は存在しないし、〈生〉があれば、必ず〈死〉がある。そうであるならば、深みのある本当の人としての歩みは、しっかりと死を意識した時からスタートを切るもののような気がする。言い換えれば、味わいのある人生は、死ぬという存在であることを知識として得た人間だからこそ、かなえることができるのかもしれない。

しかし、そのように考えたとしても、私たちは死ぬために生まれたわけでも、死ぬために生きているわけでもない、という強い批判を受けようである。

考え方によっては、自分がみずからの死を受け入れ、自分は死ぬのだから、あとは何も考えなくても、それでよいではないか。周りがどう思おうと、死ぬのは自分であり、どんな死に方をしようと、どうなろうとかまいやしない、と考える人がいてもさほど不思議ではない。それも、死に方の一つのあり方として、筆者は否定をしないし、批判もする気はない。しかし、それでは、あまりにも悲しく、むなしすぎるのではないか。

今から、一世紀以上昔の明治39年（1906年）に、アメリカのニューヨークの出版社から日本人が英語で書いた本が出版された。当時、アメリカ・ボストン美術館で中国・日本美術部長を務めていた岡倉天心によるもので、天心は、明治時代に活躍した文明思想家であり美術運動の指導者とも称されている。

著名な岡倉天心が英文であらわした本は、『茶の本』（*The Book of Tea*, 1906）という名の書名で、日本の「茶道」の精神を通じて、日本人の文化や日本人の精神などを解説している。

この『茶の本』の中に、次のような逸話が載っている<sup>34)</sup>。「雪村の描いた有名な達磨の絵を秘蔵していた細川侯の城が、守護の侍の不注意から火事になった。なんとしても貴重な品を救い出さねばならないと決心した侍は燃えさかる城の中に飛び込み、掛け物を手にしたが、四方を火に囲まれて出口を見出せない。ひたすら絵のことだけを気遣う侍は、やむなく、自分の腹を刀で切り裂くと、雪村をちぎった袖に包み、大きく口をあけた傷口深く押し込んだ。ようやく火がおさまった後、くすぶる余燼よじんのあいだから、なかば焼けただれた遺骸が発見されたが、その遺骸の中には、秘宝が火にも損なわれることなくおさまっていたという」というのである。

これは、当時の侍の忠誠心や献身がどれほどのものであったかをよく物語っている逸話といってよいが、まことに見事な死にざまであり、侍としての美的死とでもいえる逸話でもある。

また、今から20年も前になるが、平成13年（2001年）1月26日の19時頃にJR東日本山手線「新大久保駅」で鉄道人身傷害事故が起きたが、当時、この事故は大きく報道されたことから、多くの人たちの記憶に残っていることと思う。

事故は、山手線「新大久保駅」で、駅構内の売店で購入した酒を飲んで泥酔した男性がプラットホームから線路に転落した。この男性を救助しようとして、日本人カメラマンの関根史郎（当時47歳）と韓国人留学生の李秀賢（イ・スヒョン／当時26歳）がすぐに線路に飛び降りたが、折から駅に進入してきた列車にはねられ、3人とも死亡した<sup>35)</sup>。この事故を受けて、「新大久保駅」では、事故のあった年に、転落者が逃げ込めるように、ホーム下に避難スペースを設ける工事が行われている。

これらのことは、誰もが同じ行動をとり得るものではない。少なくとも、筆者にはとうてい不可能と思える行動である。いずれも、死にゆく者の勇気、正義、そして、見事なほどの覚悟をみることができる。そこに、誰もが、感動と感嘆、畏怖いふと神聖な気持ちを抱いてしまうのである。

世界的にも有名な〈聖フランシスの祈り〉の後半は、次のような祈りとなっている。

聖フランシスの祈り<sup>36)</sup>

（前 略）

どうぞこの私が  
自分を正当化するよりも  
他になぐさめをあたえ  
服従を求めるよりも  
他を理解し  
名誉を求めるよりも  
他を愛するようにしてください  
なぜならば  
私たちは自分を与えことによって  
人々を癒し  
相手の話を聴くことによって  
なぐさめを与え  
そして死によって永遠の生へと生まれ  
かわるからです

最後に、改めてお気づきのことと思うが、愚稿では、終始、〈いのち〉をひらがなで記しているに気づくであろう。それは、次のような意味あいからである。

たとえば、日本語の漢字の「生命保険」や「生命維持装置」という用法の〈生命〉は、〈せいめい〉とも〈いのち〉とも読むが、この場合の〈生命〉は、身体のことである。したがって、「生命保険」や「生命維持装置」は、その本人が死亡した場合には、その役割を終えるものであることから、身体（肉体）としての〈生命〉との関係が重視される。

一方、〈いのち〉の方は、一人の人間が、人間として、誰にも代わることのできないこの地上に生きた意味や意義、またその人間個人の尊厳、価値観や思考など、その身体が失われても忘れられず、未来に受け継がれていくものと考えている。だからこそ、身体としての「生命」が失われてもなお、永遠に残り朽ちることのない〈いのち〉のあり方を後世に生きるものが守り、受け継いでいく責任があるのではないだろうかと考えている。

魂を持つ人間であるかぎり、「その人の人生の軌跡や業績、血縁的な人間関係、喜怒哀楽の人的なしがらみ、そういった関係がその人の死によって、突如として一切が断ち切れ、消えてなくなるわけではなく、死後も残ってなにがしかの影響が

尾を曳く」<sup>37)</sup>のである。

この地上に生きた人間の証として、死後においても、長く多くの人々にその人柄が語られ、深く追慕される人生であれば素晴らしいことであるが、これらの事柄については、第二部（Ⅱ）の後半部分で静思できればと考えている。

## 注

- 1) アルフォンス・デーケン『よく生きよく笑いよき死と出会う』、岩波書店、平成15年。なお、〈死生学〉(Thanatolog)の研究は、特に欧州で盛んに行われているが、日本において積極的に研究が行われているとはいえない。〈死生学〉とは、ギリシャ語の thanatos (死) と logos (学問) の合成語であり、一般的には、〈死〉を巡る諸問題を学際的に取り扱う分野・領域を指している。
- 2) 村上則夫『システムと情報』、松籟社、平成7年、122頁より。本書は、著者の最初の著書で、システム論的な思考に基づいて、システムとしての社会と人間、そして情報とのかかわりを考察した著作である。
- 3) カール・ヒルティ著・草間・大和訳『幸福論』（第二部）、岩波文庫、昭和37年、351頁。
- 4) 柏木哲夫『安らかな死を支える』、いのちのこば社、平成20年、4頁。
- 5) 同上書、5頁。
- 6) この示唆に富んだ指摘は、カール・ベッカー「〈死の質〉と現代日本のタミナル・ケア」『現代生命論研究』、平成8年 <http://doi.org/10.15055.00005891>の中に記されている。
- 7) 江原昭善『人間はなぜ人間か—新しい人類の地平から—』、雄山閣出版、平成10年、183頁。
- 8) 同上書、178頁。
- 9) 相田みつをは、大正13年5月20日（1924年5月20日）、栃木県足利市に6人兄弟の三男として生まれている。相田氏の「つまづいたっていいじゃないか にんげんだもの」、「おかげ おかげ おかげさん合掌」などの作品は、とりわけ日本国民に知られている。相田みつをは、平成3年12月17日（1991年12月17日）、67歳で死去している。
- 10) 筆者は、以前、〈生〉と〈死〉についてのあり方ないし姿勢について検討してみたが、今回の愚稿は、主に〈生〉と〈死〉の意味について検討したものである。以前、筆者が著した〈生〉と〈死〉についての小稿は下記のとおりである。村上則夫「人生の四季に関する散策的思考—人生の春夏秋冬を生きる—」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第56号、実践経営学会関西支部会、平成30年、33-44頁。村上則夫「〈生〉と〈死〉についての一考（Ⅰ）—いのちの終章をどう生きるか—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第54巻第1号、長崎県立大学、令和2年、47-74頁。村上則夫「〈生〉と〈死〉についての一考（Ⅱ）—いのちの終章をどう生きるか—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第54巻第2号、長崎県立大学、令和2年、45-70頁。
- 11) ハロルド・S・クシュナー著、松宮訳『恐れを超えて生きる』、春秋社、平成29年、203頁。
- 12) エリザベス・キューブラー＝ロス著・川口訳『死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話—』、読売新聞社、昭和46年。
- 13) エリザベス・キューブラー＝ロス著・川口訳『続 死ぬ瞬間—最後に人が求めるものは—』、



読売新聞社、昭和52年、28頁。

- 14) 筆者のこれまでの「地域活性化」や「まちづくり」などについての考え方や調査・研究の試みについては、主に下記の成果として刊行している。村上則夫『地域社会システムと情報メディア〔三訂版〕』、税務経理協会、平成17年。村上則夫「地方自治体におけるGISの利活用に関する一考察」長崎県立大学経済学部学術研究会編『長崎県立大学経済学部論集』、第47巻第4号、長崎県立大学経済学部学術研究会、平成26年、79-99頁。村上則夫「市民協働の現状と課題に関する一考察」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第49号、実践経営学会関西支部会、平成27年、13-24頁。村上則夫「地域社会の再創造のあり方をめぐる思索—心豊かなまちづくりの考え方とその方向性—」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第51号、実践経営学会関西支部会、平成28年、23-34頁。村上則夫「地域社会の再創造のあり方に関する一考察—まちづくりの取り組みとその方向性を巡る思索—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第50巻第4号、長崎県立大学、平成29年、119-141頁。村上則夫「現代の地方都市における未来構想—長崎県平戸市『平戸市未来構想羅針盤』を中心に—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第52巻第3・4号、長崎県立大学、平成31年、127-150頁。村上則夫「現代の地域創造をめぐる思索—心豊かなまちづくりのあり方を考える—」長崎県立大学経営学部編集委員会編『これからのビジネスと地域』（長崎県立大学シリーズ1）長崎文献社、平成31年、18-27頁。

余談ではあるが、筆者の3年生のゼミナールの研究・活動テーマ（2020年度）は、「人間と動物とのいのちの共生と地域発展のあり方を考える—地域ネコの問題を中心として—」として、〈いのち〉の問題について検討・考察し、毎年多数殺処分されているネコのいのちを救うとともに、「ネコカフェ」の開設と運営を通じて、魅力ある地域発展を実現する方策のアイデアを出しあう若者たちなりの〈生〉への取り組みを展開した。

- 15) O・ヘンリ『O・ヘンリ短編集（一）』、新潮文庫、昭和44年、45-46頁。
- 16) このたとえ話は、イエス・キリストが「どんな貪欲にも気をつけ、警戒しなさい。人があり余るほど持っていて、その人のいのちは財産にあるのではないからです」と前置きしたうえで、イエスを取り巻く多くの群衆に話したたとえ話しである。新日本聖書刊行会訳『聖書』（新改訳2017）、「ルカの福音書」第12章第16節～第20節、いのちのこば社、平成29年。
- 17) テレビアニメや絵本などでも「一休さん」として親しまれている一休宗純は、僧侶であり、詩人であるが、詩のほか狂歌や書画をよくし奇行の持ち主としても知られている。一休は、明德5年1月1日（1394年2月1日）に京都に生まれ、文明13年11月21日（1481年12月12日）に、満87歳（享年88歳）で没している。
- 18) 日本人にとっては、その人となりを詳しく知らなくても、「良寛」の名を知らない人はいないであろう。良寛は、宝暦8年10月2日（1758年11月2日）に越後国出雲崎（現在の新潟県三島郡出雲崎町）に生まれ、天保2年1月6日（1831年2月18日）に没し、新潟県長岡市島崎の隆泉寺にお墓がある。
- 19) 厚生労働省「平成元年（2019）人口動態統計月報年計（概数）の概況」  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai19/index.html> より。
- 20) エリザベス・キューブラー＝ロス著・川口訳『続 死ぬ瞬間—最後に人が求めるものは—』、前掲書、25頁。
- 21) 同上書、25-26頁。

- 22) 新日本聖書刊行会訳『聖書』（新改訳2017）、いのちのことば社、平成29年、第2章第7節より。
- 23) 同上書、「ローマ人への手紙」第6章第4節～第5節。
- 24) ドロテー・ゼレ著・堀訳『内面への旅—宗教的経験について—』、新教出版社、昭和58年、28頁。
- 25) 佐々木恵雲「生死（せいし）と生死（しょうじ）」 <http://h-kishi.sakura.ne.jp/s-68.htm>より。通常、「生死」という漢字を「しょうじ」と読むことはまずないし、この読み方を知る人も多くはないであろう。仏教では、生死流転の苦しみの深いことを海にたとえて、「生死（しょうじ）の海」「生死（しょうじ）の苦海」という熟語がある。兼好法師の「徒然草」の一節「五月五日、賀茂の競べ馬を」に、「我等が生死（しょうじ）の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなをほまさりたるものを」とある。なお、「生死」という漢字は、他に「しょうし」とも読む。
- 26) 大岡信「死生観私見」河合他『死の科学と宗教』（岩波講座 宗教と科学7）、岩波書店、平成7年、302頁。
- 27) 中野孝次「我等<sup>われら</sup>が生ける今日の日」新潮45編集部『死ぬための生き方』（新潮文庫）、新潮社、平成3年、231頁。
- 28) 『葉隠』（全11巻）は、今から300年ほど前の江戸時代中期に書かれた書物といわれている。佐賀鍋島藩士である田代陣基は、すでに隠居し草庵に住んでいた元佐賀鍋島藩士・山本常朝を訪ね、草庵近くに移り住んで『葉隠』の筆録に努めた。田代が山本に初見したのが、山本が52歳の時で、その9年後の享保4年（1719年）に61歳で山本が没している。一方の田代の方は、寛延元年（1748年）に71歳で亡くなっている。
- 29) 大岡信「死生観私見」河合他『死の科学と宗教』（岩波講座 宗教と科学7）、前掲書、354頁。
- 30) この点については、村上則夫「〈生〉と〈死〉についての一考（I）—いのちの終章をどう生きるか—」、前掲書を参照されたい。
- 31) 奥村一郎「死と祈り」河合他『死の科学と宗教』（岩波講座 宗教と科学7）、岩波書店、平成7年、337頁。
- 32) 隅谷三喜男『『生』を充実させる『死』』新潮45編集部『死ぬための生き方』（新潮文庫）、新潮社、平成3年、161頁。
- 33) 中野孝次「我等<sup>われら</sup>が生ける今日の日」、前掲書、231頁。
- 34) この箇所の記事は、岡倉天心の『茶の本』に関して、大久保喬樹氏が訳した『新訳 茶の本』、角川文庫、平成17年からのものである。岡倉天心は、文久2年12月26日（1863年2月14日）生まれ。大正2年9月2日（1913年9月2日）に病気で逝去している。50歳での死である。『茶の本』は、英語で執筆されている。
- 35) 事故で亡くなった韓国人留学生の李秀賢氏の両親は、「息子ができなかったことを実現してほしい」との思いから、見舞金を基に「李秀賢顕彰奨学会（現エルエスエイチアジア奨学会）」を設立し、令和2年（2020年）までに奨学金を支給した留学生は、18ヶ国・地域／998人にのぼった（『西日本新聞』、令和3年1月27日、朝刊、21面より）。
- 36) これは、「聖フランシスの祈り」の後半部分であり、チャールズ・C・ワイズ翻案によるものである。ここにあげたこの祈りは、エリザベス・キューブラー＝ロス氏の『続 死ぬ瞬間—最後に人が求めるものは—』、前掲書の扉部分に記されたいものを引用している。
- 37) 江原昭善『人間はなぜ人間か—新しい人類の地平から—』、前掲書、172頁。

## 主要参考文献

- 相田みつを『ただいだけで』、PHP 研究所、平成29年。
- アルフォンス・デーケン『よく生きよく笑いよき死と出会う』、岩波書店、平成15年。
- 江原昭善『人間はなぜ人間か—新しい人類の地平から—』、雄山閣出版、平成10年。
- エリザベス・キューブラー＝ロス著・川口訳『続 死ぬ瞬間—最後に人が求めるものは—』、読売新聞社、昭和52年。
- O・ヘンリ・大久保訳『O・ヘンリ短編集（一）』、新潮文庫、昭和44年。
- 大岡信「死生観私見」河合他『死の科学と宗教』（岩波講座 宗教と科学7）、岩波書店、平成7年、299-332頁。
- 岡倉天心、大久保喬樹訳『新訳 茶の本』、角川文庫、平成17年。
- 奥村一郎「死と祈り」河合他『死の科学と宗教』（岩波講座 宗教と科学7）、岩波書店、平成7年、333-362頁。
- カール・ヒルティ著・草間・大和訳『幸福論』（第二部）、岩波文庫、昭和37年。
- 柏木哲夫『安らかな死を支える』、いのちのことば社、平成20年。
- 新日本聖書刊行会訳『聖書』（新改訳 2017）、いのちのことば社、平成29年。
- 隅谷三喜男「『生』を充実させる『死』」新潮45編集部『死ぬための生き方』（新潮文庫）、新潮社、平成3年。
- ドロテー・ゼレ著・堀訳『内面への旅—宗教的経験について—』、新教出版社、昭和58年。
- 中野孝次「我等<sup>われら</sup>が生ける今日の日」新潮45編集部『死ぬための生き方』（新潮文庫）、新潮社、平成3年。
- 『西日本新聞』、令和3年1月27日、朝刊。
- ハロルド・S・クシュナー著、松宮訳『恐れを超えて生きる』、春秋社、平成29年。
- 村上則夫『地域社会システムと情報メディア〔三訂版〕』、税務経理協会、平成17年。
- 村上則夫『社会情報入門—生きる力としての情報を考える—』、税務経理協会、平成21年。
- 村上則夫「地方自治体における GIS の利活用に関する一考察」長崎県立大学経済学部学術研究会編『長崎県立大学経済学部論集』、第47巻第4号、長崎県立大学経済学部学術研究会、平成26年、79-99頁。
- 村上則夫「市民協働の現状と課題に関する一考察」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第49号、実践経営学会関西支部会、平成27年、13-24頁。
- 村上則夫「地域社会の再創造のあり方をめぐる思索—心豊かなまちづくりの考え方とその方向性—」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第51号、実践経営学会関西支部会、平成28年、23-34頁。
- 村上則夫「地域社会の再創造のあり方に関する一考察—まちづくりの取り組みとその方向性を巡る思索—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第50巻第4号、長崎県立大学、平成29年、119-141頁。
- 村上則夫「人生の四季に関する散策的思考—人生の春夏秋冬を生きる—」実践経営学会関西支部会編『関西実践経営』（実践経営学会関西支部会誌）、第56号、実践経営学会関西支部会、平成30年、33-44頁。
- 村上則夫「現代の地方都市における未来構想—長崎県平戸市『平戸市未来構想羅針盤』を中心に—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第52巻第3・4号、長崎県立大学、平成31年、127-150頁。
- 村上則夫「現代の地域創造をめぐる思索—心豊かなまちづくりのあり方を考える—」長崎県立

大学経営学部編集委員会編『これからのビジネスと地域』（長崎県立大学シリーズ1）長崎文献社、平成31年、18-27頁。

村上則夫「〈生〉と〈死〉についての一考（Ⅰ）—いのちの終章をどう生きるか—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第54巻第1号、長崎県立大学、令和2年、47-74頁。

村上則夫「〈生〉と〈死〉についての一考（Ⅱ）—いのちの終章をどう生きるか—」長崎県立大学佐世保校学術研究会編『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』、第54巻第2号、長崎県立大学、令和2年、45-70頁。

### 参考サイト

カール・ベッカー「〈死の質〉と現代日本のタミナール・ケア」『現代生命論研究』、平成8年、43-50頁。 <http://doi.org/10.15055.00005891>

厚生労働省「令和元年（2019）人口動態統計月報年計（概数）の概況」

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai19/index.html>

佐々木恵雲「生死（せいし）と生死（しょうじ）」 <http://h-kishi.sakura.ne.jp/s-68.htm>